復興釜石の飛躍を願う

派 遣 先　釜石市産業振興部水産課
所　　属　危機管理室　危機管理課
氏　　名　中村　幸一
活動期間　平成２８年４月１日～（継続中）

平成 31 年 3 月で東日本大震災が発生して 8 年が経過し、釜石での私の勤務も 3 年目が終了する。復興計画期間も残すところ 2 年となったが、この 1 年で釜石のハード面の整備は目に見えて進み、新生釜石市へと変貌を遂げつつある。

砂利道だらけで土埃が舞い歩きにくかった釜石市役所周辺の道路も、かさ上げが終了した今では歩道つきの立派な舗装道路に生まれ変わり、車も人も通行しやすくなった。また、いたる所で工事が行われ騒音が激しかった町中も整備が進むにつれて段々落ち着きを取り戻しつつある。同時に、工事の終了や復興の進捗に伴い釜石を去る工事関係者なども多いのか、夜の飲食店街を覗いてみても、休日の町中を歩いてみても、心なしか釜石の人口密度が少し低下したような気がしている。

【釜石での業務】

引き続き産業振興部水産課に所属し、防潮堤事業用地の買収業務及び水産課所管用地の管理業務を行った。

【平田漁港防潮堤】

29 年度末に買収した用地の補償金の支払い事務も 5 月一杯で無事に終了した。これをもって平田漁港の用地買収はすべて完了した。

【白浜（釜石）漁港防潮堤】

○「町内会に準じる団体」所有の土地

この地域には、事業用地の中に相続関係人が 500 名を超える共有地が存在している。幸い、この土地は地元町内会に準じる団体の所有地で、その団体名では登記できないので、90 名を超える個人名で登記されていた土地だった。こういった性格の土地については、「認可地縁団体」制度があり、総会で団体名義に登記することを決議し、市に「認可地縁団体」の諸要件を満たすと認定されれば、登記名義をその団体に変更することができる。この手続きを経た後、無事に団体から買収することができた。

○「休眠抵当権」が付いた土地

事業用地には、昭和初期に設定された抵当権がついた土地が 2 件あった。

実際の返済は終わっているが、抵当権の抹消だけがなされていないと推測される。

休眠といえども、市が抵当権の付いたままの土地を買うことはできないので抹消す

る必要がある。 1件は設定権者である法人の代表清算人だった方が健在だったので、その方から抹消承諾書をいただいて抹消することができた。もう 1 件は設定権者の相続関係人十数名から抹消承諾書をいただく方向で交渉したが、どうしても数名の関係人からの理解が得られないため、最終的に所有者の方から裁判所に抵当権抹消の訴訟を起こしていただいた。手続きに時間はかかったが、抹消判決を得て無事に抵当権を抹消し取得することができた。

その結果、白浜（釜石）漁港の買収も、残すところ神社の鳥居の移設補償だけになった。

【用地管理業務】

用地買収と併行して、これまで買収してきた土地も含めて水産課が所管する用地を、今後派遣組や任期付き職員が去っても管理しやすいようにするための作業（分合筆や水路・里道等の用途変更・所管替えなど）を行っている。

【2019 年の釜石】

被災から 9 年目を迎える 2019 年は、釜石市にとって大きな節目の年を迎える。

3 月には被災からずっと不通となっていたＪＲ山田線の宮古・釜石間が復旧し、三陸鉄道に移管されて運行が開始された。これで大船渡の盛駅から久慈駅までのリアス線が全線開通の運びとなった。イベント列車も企画されると思うので、機会をみて是非乗ってみたいと思っている。

また、今年は釜石・花巻間の横断道路が全て完成し、さらに釜石を中心とした縦貫道、横断道、復興道路、復興支援道路も概ね完成する運びだ。

こうした交通網の整備に加え公共施設も次々と完成している。既に昨年グランドオープンした釜石市民ホールではコンサートや演劇、行事などが行われ、市民の文化・教養・憩いの場として親しまれている。また今年は「魚のまち釜石」を発信していくための拠点施設となる「釜石魚河岸にぎわい館」が新魚市場のある魚河岸地区に建設され 4 月にオープンした。この地区が観光客や市民でにぎわうことが期待されている。

さらにラクビー・ワールドカップの釜石会場となる鵜住居地区の鵜住居駅前には、震災犠牲者の追悼、鎮魂のための「釜石祈りのパーク」、震災の記憶や教訓を後世に伝える「津波伝承施設」、地区のにぎわい・交流を推進する「観光交流施設」が 3 月にオープンした。その横には釜石市民体育館が建設されており、老朽化した釜石市役所の建て替えに向けた動きも本格化している。

これらのハード整備に併せて､6 月から 8 月にかけては釜石市を含めた沿岸各地で防災の伝承や復興に取り組む地域の姿などを発信する「三陸防災復興プロジェクト 2019」が開催され、各地で大きなイベントが開催された。

そして、この年のビッグイベントは何といっても 9 月～10 月に東北で唯一、釜石だけで開催されるラグビー・ワールドカップで、国内外から 13 万人が来釜すると見込まれている。現在、このイベントを成功させるべく県と市をあげて開催準備に追われているところである。

こうやって見てくると、釜石の復興事業もいよいよ総仕上げの段階に入ったことを実感する今日この頃である。

【余　談】

公共施設が相次いで建設されている釜石だが、建物の新設に合わせて施設の愛称がよく募集される。採用されれば自分の付けた愛称が後々まで残ることになるので、釜石でのいい思い出になると思っている。そこで、募集がある度に色々と愛称を考えて応募している。

今まで「市民ホール」「魚河岸にぎわい館」「津波伝承施設」「観光交流施設」や三鉄リアス線各駅の愛称などの募集があり応募してきたが、幸運なことに「津波伝承施設」と三鉄「岩手船越駅」の愛称が採用された。特に津波伝承施設は、愛称「いのちをつなぐ未来館」が施設の正式名称にもなり、釜石市の施設管理条例にも名称が載った。私が釜石を去っても、自分が名付けた施設が釜石にずっと残ることは嬉しくもあり光栄にも思う。平成 31 年 3 月にオープンしたので、皆さんも釜石に来られる機会があれば、三鉄・鵜住居駅前の「うのすまい・トモス」エリア内にある「いのちをつなぐ未来館」へ是非お立ち寄りください。

鵜住居駅前公共施設
「うのすまい・トモス」
整備工事

駅愛称・三鉄面白アイデアコンテスト表彰者
（意外にも県外の方が多かった）
※リアス線に乗車する機会があれば、「次は、（愛称名）本州最東端の駅・岩手船越駅です」と車内アナウンスされると思うので聞いてください。